

# いま、アメリカをどう見るか

## 帝国凋落の時代と日米関係

国際問題ジャーナリスト **金子 敦郎**

対談

本誌編集委員長 **橋川 俊忠**

- 封じ込め政策に組み込まれた日本
- 生かされなかった冷戦の教訓
- 例外主義とエリート意識
- ベトナム戦争の二つの教訓
- 差別意識といびつな民主主義
- アメリカ人の危機感と奇妙な大統領選挙
- アメリカとの新しいつきあい方

「日本に民主主義をもたらした戦後の国づくりのモデル」「強大な軍事力で世界を支配しようとする覇権帝国主義国家」：日本のアメリカ評価は正反対の極に分かれる。他方、建国以来、独自の国是、歴史、政治システムをもつ例外国家として世界の指導者を自認してきたアメリカの影響力は、冷戦の終結以降、凋落の一途をたどっている。親米反米のステレオタイプをこえて、今日までのアメリカの歴史をどう評価し、これからの国際関係のなかでアメリカをどう考えればいいのか。日本はどう向き合うべきなのか。

### 封じ込め政策に組み込まれた日本

橋川 ● 日本がこれからアジアのなかでどういう位置を占めていくかを考えるにあたって、アメリカとの関係を抜きには考えられません。よくいわれるように東アジアには冷

戦の構造が残っています。政治的、軍事的な面の議論からはアメリカ基軸論がどうしても出てきます。経済的、文化的な面から考えても、アメリカと日本は切っても切れない関係のなかにずっぽりはいつているわけです。アメリカを



日本が今後どう考えるかをとらえ返す必要があるというこ  
とで、今回の特集を組むことになりました。

かつて左翼、あるいは「革新」と呼ばれた側のアメリカ  
のとらえ方は、「反米愛国」であったり、「アメリカ帝国主  
義反対」であったり、敵対者としてのアメリカでした。し  
かし、とりわけ冷戦崩壊以降、そうした敵としてのアメリ  
カの見方の枠組みでは世界をとらえることはできなくなっ  
ていきます。にもかかわらずアメリカに対する見方ははつき  
りと変わったとも言いが切れない。反対に保守の側でもアメ  
リカ依存、あるいは親米という立場で考えていくところで  
止まっているようにしか見えない。

レートンのアメリカになりました。私たちより少し上の世代  
の秀才は、まずフルブライトなどでアメリカに留学しま  
す。これが私たち中学生、高校生にとって一つの夢でした。  
それに対して当時の政治家、吉田茂にしても鳩山一郎に  
しても、とくに鳩山さんの対中関係、対ソ関係を考えると、  
むしろ戦前の反米、自主派といっている。その人たちの自  
主日本がいつのまにかアメリカの属国のような方向に見事  
に持つて行かれた、あるいは進んでそこにいつてしまった  
という状況があったようです。

地政学からいっても、冷戦構造からいっても、実際には  
日本の選択の幅はとて小さかったわけでは、私たちが、



きつかわ・としたた

一九四五年八月北京生まれ。東京大学法学部卒。神奈川大学法学部教授。著作に、「近代批  
判の思想」(論創社)、「芦東山日記」(平凡社)、「歴史解読の視座」(共著・御茶ノ水書房)、「柳  
田国男における国家の問題」(神奈川法学)、「終わりなき戦後を問う」(明石書店)他。

アメリカがくしやみをするとう日本が風邪をひくというこ  
とがよくいわれます。実際にワシントンポストが少しでも  
日本の政府批判を書くと、日本のマスコミが過剰なほど、  
日米関係が危機に瀕していると書き立てます。日本では右  
も左もアメリカに対する見方があまりにもステロタイプな  
認識のままにとどまっています。そこを解きほぐしてい  
たいと思います。

ここではアメリカとはなにかをいろいろに論じたいと思  
います。今日の対談を特集全体をカバーする問題点、アメ  
リカを見るときこういうことを見なければいけないとい  
ことがわかるものだと思います。

金子さんと私では、世代が少しちがいますが、アメリカ  
とどう出会い、どんな印象をお持ちかというところからお  
話をうかがいたいと思います。

金子●私の世代は「鬼畜米英」から突如国のモデル、あこが  
れの対象になりました。子どもころまともな食べ物がない、  
とくに甘いものがないときにGIがチューインガムや  
チョコレートをもってやってきた。そこで一転してチョコ

それはおかしいといつて反対運動をしましたが、今考えて  
みれば、それほどいくつもの選択肢があったわけではな  
かったのでしょうか。しかし、ニクソンの対中政策などアメ  
リカのほうが現実的な対応をしていました。反ソという大  
きな枠組みを作ったそのなかに日本をはじめ多くの国を取  
り込みながら、自分は自分で巧みに現実的な外交を展開し  
ていました。切り替えがきかないままアメリカの枠のなか  
に安住してしまったのが七〇年代八〇年代の日本でしょ  
う。冷戦が終わったことはそれを見直すいいチャンスだっ  
たはずですが、アジアは冷戦構造が残っているんだと、そこ  
でも思考停止してしまつて現在に至っているのでしょうか。

橋川●封じ込め政策のなかで日本にはあまり選択肢がな  
かったというのもそのとおりだと思いますが、日本はその  
なかに組み込まれたことをけつこうずるがしく利用した  
ということはないでしょうか。冷戦構造のなかに組み込ま  
れることによって日本自体がアジアの国々と直接正面から  
対応してこなかった。中華人民共和国が成立しても無視し

かねこ・あつお

一九三五年東京生まれ。東京大学文学部西洋史学科卒業。共同通信ワシントン支局長・常務  
理事、大阪国際大学教授・学長を勤める。専攻は米国外交、国際関係論、メディア論。近著・  
論文は「国際報道最前線」(リベルタ出版)、「世界を不幸にする原爆カド」(明石書店)、「シ  
オニズム理念崩壊・人種隔離国家」(大阪国際大学紀要「国際論叢」)、「米国以後の無権化  
する世界」(現代の理論)。大阪国際大学名誉教授、カンボジア教育支援基金会長。

続けたし、朝鮮半島に対しても距離をおきつづけてきたわけです。その構造はいまだに変わっていないのではないかと。つまりアメリカの戦略のなかに巻き込まれたということと、逆にそれを利用してアジアを無視してきたという側面もあるのではないかと思います。

金子●たしかにそういえる面があります。組み込まれた、そのことを受け入れる形で経済的な面での利益を追求してきたのはそのとおりです。ただもう一つ考えておかなければならないのは、そこに組み込もうとするアメリカの強制力が非常に強かったのだらうと思います。戦後、冷戦政策が固まっていたのに数年がかかっていますが、当初はそれほどはつきりしたグローバル戦略はアメリカにもなかったと思います。そこでよくいわれるようにジョージ・ケナン

の封じ込め論が出てきます。後年、ケナンが嘆いていたように、もともと政治的、経済的封じ込めだったのに、もっぱら軍事的な封じ込めのみが推進されてしまった。ケナンが考えたことは、日本に限らず、アジアもヨーロッパも戦争で疲弊していたわけですから、これらの地域を早く復興させないとアメリカ自身が戦争経済でふくらんでしまっていてこれ以上もたない。一刻も早く、アジア、西欧の経済を復興させるためにアジアで日本、ヨーロッパでドイツを一気に経済復興させる。これが基本戦略でした。ケナンは

な時期があつたのではないのでしょうか。  
橋川●とくに日中関係の問題については、いまでもアメリカは日本と中国が親密になることをどうやら好んでいないようです。朝鮮戦争後の時期にはそれがもつと強く日本がアジアとの結びつきを強めることをかなり強硬に妨害してきた。そこをむしろ日本の左翼は、イデオロギー的にはよくとらえていたけれども、実際の関係は、戦前からの宇都宮徳馬などのアジア主義を唱えた政治家が経済関係を強めていきました。帝国主義論の呪縛が強すぎたのか、むしろ左翼の認識のほうが遅れていた。

## 生かされなかつた冷戦の教訓

金子●アメリカにしろ、日本にしろ、とぎどきの政権がその方針を決めます。そうするとそれが事実の積み重ねとしてアメリカはこういう国だということになってしまいます。そこで、ほかのアメリカが見えなくなつてしまいます。しかし、選挙を見ても五五対四五とか、四八対五二のような競り合いの結果から一つの政権が生まれることが多いのですが、その陰にはもう一つの政権の可能性が潜んでいるわけです。そこに目を向けておく必要があると思います。

ブッシュ・ネオコン外交の基本的テーマはイデオロギー

封じ込めのところばかりが取り上げられますが、いかに経済を早期に復興させるか、その延長のなかでマーシャルプランがでてくるわけです。

鳩山一郎の対ソ外交に対しては、ドレスは徹底的にこれを押さえ込もうとしています。対中関係でもそうです。朝鮮戦争まで、アメリカは朝鮮半島はアメリカの防衛線と考えていなかった（これはソ連も同じでした）。米ソははやばやと朝鮮半島から軍隊を撤収してしまいました。しかし、朝鮮戦争がおきて、これはまずいということでも新しい防衛線をつくります。その過程で、日本は戦争を、そして台湾をサポートさせられていきます。朝鮮戦争によって日本は、内政としての政治や経済だけでなく、対外政策でもアメリカに押さえ込まれていくことになりました。そのなかでかろうじてよくやったといえるのは、中国との間にLT貿易（一九六二年にはじまった日中間の半官半民貿易。七二年の国交正常化までつづいた）というパイプだけを作っていたことです。それは、戦後の政治家にはできなかったと思います。戦前派の人たちだから、よかれ悪しかれアメリカのいいなりにはならなかった面がありました。岸信介の六〇年安保のときの行動も、彼は彼なりに「オランダな安保はあまりにひどいじゃないか、もう少し対等に」ということを思っていた面がありました。非常に微妙

です。しかし、ソ連はもういなくなつた。それで代わりの敵を見つけなければいけない。中国はとうの昔にイデオロギーを放棄している。にもかかわらず、一党独裁の体制であるといつてソ連に代わるイデオロギーの敵を設定していく。さらに加えてイスラムです。これもイデオロギーの敵です。イデオロギーを掲げてしまうと不倶戴天の敵になってしまうますから、共存はむずかしくなつてきます。

日本もまさに、せっかく冷戦構造が終わつたのにアメリカの極端な部分にばかり引きずられました。その裏に何があつたかを見ないで来てしまった。そのために、アジアでは、冷戦の教訓がまったく生かされなくなつてしまったのではないのでしょうか。

冷戦が終わつたあと、アメリカが親ブッシュからクリントン政権にかけては、それなりに「冷戦後」に切り替えようとする時期がありました。ブッシュ（父）は「平和の配当を出さなければいけない時代だ」といいました。もちろん私たちが思っているような「平和の配当」かどうかは別にして、戦術核を世界から撤去するといつて、朝鮮半島からも撤去しました。今現在はどうなっているか、もちろんわかりませんが、それから国防予算を減額した。そこへ、幸か不幸か、湾岸戦争がおきました。これがうまく口実として使われてネオコンが息を吹き返し、「世の中は変わつ

ていない」といって、もつと軍事力を強化しないと世界が不安定になるといいました。

クリントンは少しちがっていました。彼が考えた「平和の配当」、つまりは政治的なものよりも経済的な利益を徹底的に追求しようとして政権がスタートしました。そこで対日をはじめ経済制裁を乱発することになります。しかし、新しい安全保障体制の構築もちゃんとやれとせつつかれて、ヨーロッパではNATOの拡大をやってしまった。政権のなかでもずいぶん議論はあったようですが、そのころネオコンにはそれほど影響力はなかったはずなのに、全体としてはレーガン以後保守勢力が強くなっていく時代のなかで、NATO拡大を経済的利益につなげるということとで踏み切ってしまった。アジアでは日米安保再定義。これは日本を安全保障面でもっと使おうということですが、これが石油を確保するんだという話になり、日本はうまく乗せられてグローバルな安全保障体制に組み込まれてしまいました。ここでも日本は思考停止してしまっただけです。今でも鮮明に覚えています。

## 例外主義とエリート意識

橋川・子ブッシュの二〇〇〇年の最初の選挙のとき、一般

いうことだったか。それぞれが都合のいいところだけをつまみ出して、都合のいい解釈をします。たとえば、いまアメリカで最大の政治争点というと、小さい政府か大きい政府かですが、ファウンディング・ファザーズがいつているのは小さい政府だということで、小さい政府派が断然優勢です。しかし、独立して国づくりのはじめからフェデラリストと反フェデラリストの対立はありました。ワシントン、ハミルトンたちは、中央にきちんとした政府を作つていかなければならないと考えていました。たとえば中央銀行が必要だといっていました。いまだにアメリカには中央銀行はありません。連邦準備制度の集合体が事実上の中央銀行にすぎないだけです。当時から争点特殊なことで金融制度に残っているのです。

そうした例外主義、世界の指導者であるという意識が、戦後の冷戦を率いたという面もあったのかもしれない。この一〇年をみると、そのことの弊害ばかりが目立ちます。

もう一つ興味深いのは、アメリカの陰謀史観好きです。自分が権力を握るとそれを維持するために、異常なほどの恐怖感をもつようです。私はそんなものもつたことはないから実感できませんが（笑い）。つねに誰か悪いやつがいって陰謀をめぐらしてアメリカの覇権を奪おうとしていると

投票では負けているのに、フロリダの間接選挙で当選したという事態についてアメリカのダールという政治学者が『アメリカ憲法は民主的か』という本を書いて、ああいう事態についての問題意識と、その上でアメリカは独立宣言と憲法に縛られすぎている、そこを見直さなければならぬといっています。

私はアメリカでの体験がありません。実際にアメリカにいらつしやつて独立宣言や憲法の力を感じられることはありますか。

金子●アメリカの新聞を見ると、ファウンディング・ファザーズ（建国の父祖たち）ということばがしょっちゅう出てきます。彼らが革命と呼ぶ独立戦争のリーダーたちです。特別な建国の歴史を誇るのはいいのですが、例外主義（アメリカだけが、国是、歴史、政治など、他の国と質的に異なるという信条）になつていく面をもっています。これが困ったことです。

たしかに例外の国ではあるけれども、その意識がものすごく強い。その例外主義が即、指導者意識につながります。汚れきつた旧世界を飛び出して新しい国を作つてきたという自負心がとことんアメリカ人にしみこんでいると思います。

ではファウンディング・ファザーズがいつたことはどう思っているようですか。それがたとえば、過去には共産主義だつたり、いまはイスラムだつたり。国連などの国際機関は信用しません。わけのわからない国が集まつて、そこそ陰謀をめぐらせて、ソ連や中国、最近では反イスラエルのイスラム諸国が後ろで糸を引いて反米の政策マシンになつていっていると思つている。

この例外主義が今もつとも先鋭化しているように思いますが。いい例は地球温暖化問題です。これは社会主義の陰謀ということになります。アメリカの資本主義を破壊しようとする陰謀だということです。世論調査をすると、そう思っている人が三割から四割もいるという結果が出てきて驚きます。昨年の選挙で共和党の上院下院、地方選挙の候補者の半分以上は「温暖化問題は陰謀だ」と信じています。この国はおかしくなつていると私は感じてしまいます。

橋川●もともと指導者意識、建国の人たちに勝手な解釈を投影して、そこから世界的な使命を引き出してきて独善的に外交を展開する。その独善性が二通りある。たとえば、ウイルソンのようなある種の理想主義的な形ではあるけれど、ある意味では押しつけ。いまでもカーターやクリントンの頃の人権外交といったことも、一種の押しつけです。ただし、押しつける中身は悪くはない。一方で陰謀史観、あるいはアメリカの国益を、資本家の利益が世界の基軸に

なるべきだといって押しつけてくる。人権外交という普遍的善を掲げているときも、あるいは国益を追求しているだけのときにも、つねに「押しつけ」です。

金子●人権外交を見てみると、いまアメリカが変わってきていることがわかります。もともと人権外交は、カーターが言い出しました。アメリカは民主主義を掲げながら、反共であれば独裁者でも強権政権でも支持してきました。これはおかしいとカーターはいったわけでは

そのやり玉に上がったのが韓国の朴政権だったり、チリのピノチェットだったり。それに対して現実主義を持ち出してカーターの人権外交が「安定」を乱したといつてもものすごく非難しました。ところがレーガンあたりからアメリカが気に入らない政権をつつくとくに人権外交をさかんに使うようになりました。しかし中国やイランの人権抑圧は非難しても、エジプトやサウジアラビアには何も言わない。イスラエル占領下のパレスチナ人の悲惨な状況は見ないふりです。

アメリカは常にそういう問題を抱えながらも二〇〇三〇年前まではそれなりのバランス感覚が働いていたと思いますが、ここところがまずい国になっているのではないかと思うところでは

ました。これが見事な成功を収めていきました。象徴的な問題として、男女同権の問題、E R A（イコール・ライト・アmendメント、男女平等を謳った憲法修正案）というのがありました。ちょうどその頃、私はアメリカにいました。「ベトナムの反省」からあちこちの州で死刑廃止やE R A支持が広がりました。憲法改正は四分の三の州が批准しないと成立しません。三五をこえないといけない。三二〇三三くらいまではいきます。これを草の根の保守派が残ったいくつかの州で徹底的にE R Aに反対する運動を展開しました。あと一息まで行ったのに結局挫折してしまいました。

そうした運動を展開した人たちは、アメリカにとつての「危機」を感じた人たちです。ベトナム反戦や公民権運動が盛り上がった。しかし、これではアメリカがだめになつてしまうというわけです。アメリカの指導者意識、例外主義は、根つこのところは保守もリベラルも変わりません。アメリカは弱くなつてはいけないという主張は広い共感を得るのです。

橋川●ベトナム反戦運動や公民権運動に対する反動、それは妊娠中絶に対する反対や同性愛者どうしの結婚に対する反対など、家族や倫理の崩壊に対する危機という形で受け止められたのではないかという面がひとつ。それと世界の

## ベトナム戦争の二つの教訓

橋川●歴史的に振り返ると、アメリカはしよせん外交では二重外交か二枚舌かという面は否定できない。建国の父祖といふけれども、そのときに奴隷制はどうしたか、ネイティブアメリカンをどうしたか、これらは視野の外にあつた。

金子●その通りです。ダブルスタンダードもいいところでは。七〇年までのアメリカを我々はすばらしい面がある国だと思つたのですが、その後レーガン政権の登場から現在に至る過程で、その我々がすばらしいと思つたものをまずいと思つた人たちが強い力を持つようになっていくわけでは。ベトナム戦争の反省は二つあります。一つは、もうあんなことをやつてはいけないというもの。アメリカは世界の警察官にはなれないというものです。他方で、そういうことをいつていたのでは、アメリカは世界のリーダーとしてやつていけない、世界は悪い連中が大勢いるからアメリカは強くなることによつて世界が安定する、それがベトナム戦争の教訓だと思つた人たちがいた。この人たちが、見事な政治キャンペーンを展開していきます。政治を動かす組織として労働組合や学生運動がありました。民主党はそうした組織を足場にした政治勢力だと思つてきました。ところがそういうものがどんどん弱くなっていく。他方で共和党を中心にした勢力が草の根の組織化に取り組んでいき

なからアメリカの地位が相対的に下がってきたことに対する危機感の表れという面がもうひとつ。いまの日本で家族の崩壊が問題になっているようなことが、アメリカでは七〇年代後半から目立ってきて、それが反動を呼んだのではないのでしょうか。

金子●その通りですね。ベトナム戦争などで社会が荒廃しました。家族を含めた社会の秩序が崩壊していくと見えただけでしょう。カウンターカルチャーと呼ばれる新しい生き方、生活が登場しました。そうした新しいものへの素朴な危機感が、右か左かリベラルか保守かというちがいをこえて広がつたように思います。これは非常に重要なところで、先ほどのE R Aや妊娠中絶のことなどを取り上げられて、巻き返されていきました。

家族という問題では、キリスト教のエバンジェリスト（福音派）が一気に表に登場します。福音派の大教会が一気に何百万という会員をもつようになります。これが大きな影響力を持ちます。いまもその時代が続いているといつていいでしょう。

リベラルがこれに立ち向かつていく姿勢が弱かつたのではないかと思えます。私たちが見えていてもアメリカの家庭、夫婦関係というのはどうにもならないところまで来ているように思えます。

## 差別意識といびつな民主主義

金子・健康保険問題に対する姿勢を考えると今のアメリカ人の意識がよくわかります。その背景をみるために重要なことは「アメリカン・ドリーム」です。それは、どんな国からやってきた貧乏な移民でも一生懸命働けば、かならず大金持ちになれるということです。それが保障されているのがアメリカだということになっていて、実はそれがほとんど実現不可能になっています。しかしながら、社会保障には大多数が反対します。それは社会主義だという。社会主義はアメリカン・ドリームでがんばっている人たちをがんばらなくさせてしまうということです。自己責任で働いているから、果実は全部自分のものになるという、それが建国の精神だということです。

これはことばとしては実に格好のいいものですが、実は裏があります。奴隷制度にその基盤があつたと思えますが、差別構造がアメリカにとつて重要です。アメリカで今いちばん保守的な人たちはプア・ホワイト（貧しい白人）、さらに最近はまだ少し上の中産階級の白人です。健康保険でいちばん恩恵を受ける人たちははずですが、この人たちが反対している。それはなぜか。この人たちにとつていちばんいやなことは、自分たちの下にいる黒人やヒスパニックが社会保障の恩恵を受けて、能力も働く意欲もないのに

ばですが」として絶対反対だとなる。

橋川・憲法システム、国家システムを見ても、大統領選挙のしくみはどう考えても合理的とはいえません。代理人の数の配分からいつてもきわめて不均衡です。もしもアメリカが平等にこだわるなら、いつまでもあんな制度を放置しているのはおかしい。現に子ブッシュが当選したときには一般投票と選挙結果が逆転していました。アメリカの大統領選挙で二度目の事態でした。上院と下院の問題にしても上院が各州二人です。州の規模がまったくちがうにもかかわらず、州単位で決められています。これが憲法改正や条約の承認にかかわる大きな壁になっています。先ほどのERAでも、結局あと三つの州が承認するかどうかの問題でしたが、そこが人口をたくさん抱えた州なのか、小さい州なのか。小さい州のほうが保守的なところが多い。こうしたシステムはどう考えてもあまり民主的とは思えない。

金子・ただチェック・アンド・バランスをものすごく重視したところがあります。ファウンディング・ファザーズたちは独裁を防ぐメカニズムとしての今の特殊な政治システムをつくりあげたといっているわけです。今また、小さな政府の問題とからんで大きなテーマになっていることが州権ということです。州権を絶対に譲れない、もつと取り返さないとならないといえます。

自分たちと同じ程度の生活ができるのはおかしいじゃないかと思っているのです。

橋川・ニューデイル以来、ある程度社会保障制度が導入されて、いまでも食料券が残っていますね。ああいう仕組みは日本の考え方とずいぶんちがっていて、日本だったら、年末の派遣村のように社会のシステムで考えるのには、ある意味では、露骨に食料券を与えて貧乏人に食料と取り替えてやるよというやり方は日本では考えない。アメリカでは、個人の自由が基本だから、そこから落ちこぼれたものには、それでお恵みを得ているんだよという格好で相手に善意を押しつけるという形でしか助けない。

金子・アメリカで抜け道になっているのが、教会なども含めた慈善活動です。格差社会が日本で問題になっていますが、アメリカほど徹底した格差社会はありません。そこをどうごまかすか。いくら稼いでもいい、しかしその金を慈善に使えば、税金がかからない、そういう制度になっています。ビル・ゲイツのようなずっと世界最高の資産家だという人がべらぼうな金を慈善につき込んでいます。国内にかぎらず、アフリカなど外国にも使っていく。それでごまかしているところがある。それはお恵みだから、プアホワイトは問題にしないのですが、制度として社会福祉に税金を使うことには、「タックスペイヤー」（これが重要なこと

今年南北戦争がはじまった一八六一年、サウスカロライナの連邦軍のサムター砦に南部同盟の部隊が攻撃を仕掛けてからちょうど一五〇年にあたります。南部諸州では、戦争を振り返るといふ動きが起こっています。そこで、南北戦争はなぜ起こったか。もつと州権を強めなければいけないといっている人たちは、南北戦争は州権を強めるための戦いだつたといってお祭りや記念行事をやっているのです。北部の新聞はとんでもないデマゴグだといっています。明らかに、奴隷制に賛成か反対かが戦争の原因だつたのですが、南部の人たちは「そうではない。それを決めるのは州の権限なんだ」というのです。奴隷制の問題ではないと。州権を取り上げようとしたから戦争になつたというすり替えをしています。それが今議論になっています。雑誌、新聞でそんな議論がちよくちよく登場しています。今の保守派は、中央の権力を握って支配しようとする一方で小さい政府のファウンディング・ファザーズの原理に戻れということをしています。

昨年の中選挙のあと、一月に国会が召集されました。ティーパーティー（茶会運動）などの要求があつて憲法をみんなで読み上げるといふ奇妙な行事をやりました。そのなかで都合の悪いところは全部抜かしていました。アメリカの原理といつても都合のいい解釈をしているということ

です。対立が非常に先鋭化している、リベラルと保守の権力闘争がとことんまで来ています。オバマがイスラムの世界陰謀の手先だということを相当の数の人が信じているという現実をみると、アメリカはますます変なところに行くのではないか。それは、世界が困ります。日本の政治家もマスコミももう少しよく見てアメリカとのつきあい方を考えていく必要があります。とても心配な状況だと思います。

## アメリカ人の危機感と奇妙な大統領選挙

橋川●南部が宗教保守の基盤になっていますね。オバマが登場したときにはアメリカも変わろうとしているのかと思いました。外から見ても、大統領候補が女性とアフリカ系でした。二人が争ってなおかつアフリカ系男性の大統領が誕生した。これは画期的なことだったはずですが。しかし、それが二年たって、ウォルフレンというオランダのジャーナリストが最近、オバマも結局、産軍複合体の論理に取り込まれて、保険改革にしても、保険資本と薬や医者業界に負けて何も変えられない、このままではアメリカは沈没するといっています。そのあたりは私にもよくわかりませんが、その通りですか。

金子●そうだと思います。あれだけの熱狂的な状況が生まれるのはアメリカには生まれにくい。シップはアメリカには生まれにくい。

金子●それはたいへんでしよう。これだけ両極が開いていきますから。お互いに歩み寄ろうということをしうしかなないのでしよう。保険複合体から産軍複合体までとことん強くなってしまうました。これはアイゼンハワーが本当に心配したけれども、どうしようもありません。オバマ大統領がロシアとの核軍備削減条約を議会を通そうと思うと、「餌」を出さない限り通りません。仕方がないから少し餌を出しますといつて通す。臨界前の核実験もやった、オバマの「核廃絶」に期待していた広島や長崎の人たちはがっかりしたり、怒ったりしています。それはよく分かります。

でもアメリカを動かしているのは、われわれが考えているような「政策」ではありません。日本も同じでしょう。これは有名な話です。ケネディとニクソンの一九五九年の選挙のときに、政治キャリアなどからすれば、ニクソンのほうが有利だろうと思われていましたが、あのときにはじめてテレビ討論が導入されてケネディはなかなかハンサムでいいじゃないかということになった。二人が対決するテレビ番組の前にケネディのスタッフが見事に化粧をはじめ、ネクタイをどうするかまでイメージづくりを一生懸命でした。ニクソンのほうはそんなことは無頓着であつちこつち遊説した足で疲労したままスタジオにはいつてきた。そこ

れて政権交代しました。それがわずか一年かそこらでいっぺんに地に墜ちたのは、私たちにもよくわかりませんが、かつてキッシンジャーが日本の悪口をこう言つたことがあります。日本人は誰かがそういうと全員がその方向になびく。でもアメリカのほうかひどいと思います。もつという、あまり物事をきちんと考えない人が多数を占めているのではないかとも思わざるを得ない。保守派がレーガンあたりから、とりわけ宗教、エバンジェリストあたりが非常に世論づくりに大きな力を発揮するようになった。そのなかで保守系テレビ、ラジオを乗っ取つたといひましようか。かなり露骨な俗受けするキャスターが大活躍する状況が続いています。そこでは、イスラム教のコランはヒトラーの『我が闘争』と同じだといったコメントがまかり通っています。デマゴグが力を発揮する恐ろしい世の中になつていきます。

橋川●オバマが登場したときに一つのアメリカを強調していました。これはアメリカが実質的には分裂に対して潜在的危機を感じていたからそういつたのではないかと思ひます。いえばいほど対立の距離が広がっている。一つというたびにどちらかにおれるしかないのではないか。オバマも思ひ切つてアメリカも分裂したといひばいいのだけれども、そうはいえないのでしよう。そういえるリーダー

でテレビ討論が決定的になつたといひわれています。八〇年の選挙で、このときはレーガンとカーターでしたが、カーターはまじめなひとだつたから、理路整然と政策を説くのに対して、レーガンはイメージをうまく使い、アドリブの面白い言い回しを使ひました。カーターが私の実績がこうこうと細かいことをいふと、それを聞いたレーガンは、ところで視聴者の皆さん、あなたの生活はカーターさんがいふほどよくなりましたかと聞いたわけですが。そういわれればあまり良くなりましたかと聞いたわけですが。あがつてしまいました。翌日の新聞は二人のやりとりをページ使つて詳しく取り上げました。それを読む限りは大統領としての政策は、誰がみてもレーガンには何もないことがわかり、カーターが勝つたのは明らかでした。

橋川●オバマ個人が何かしようと思つても、構造的にどうしようもない状況にあつて、それでもまだ何かしようとする力がアメリカのなかで生まれているのでしようか。たとえば、労働組合がニューディール時代は大きな力をもつていましたが、日本と同じように八〇、九〇年代とどんどん組織率が下がつて、日本と同様に一〇パーセントそこそこでしょう。そういうところが少しは復活する可能性はあるのか。希望的な話を讀むと、福祉労働者に浸透してカリフォルニアで運動があるとかということ聞きませんが、そ

ういう復活の可能性はあるのでしょうか。

金子● どうでしょう。労働組合の弱体化は、物作り産業の地位が低下したという大きな背景があります。サービス産業労働者は基盤が広がってきます。それにアメリカの資本や経営者は上手で、北部の労働組合の地盤のある地域には新しい工場をつくらない。どんどん南部に移していく。日本の自動車会社もアメリカに行くときには労働組合がすぐ作られるようなところを避けて南部に行きました。かつてのような労働組合が復活して力をもつということはむずかしいと思います。

ただ、アメリカ人の世論がよく揺れることは、あれだけ選挙で負けたオバマがその後、意外に議会でもうまくやっているという話でわかります。本当にうまくやっているのか、まだよくわかりません。今回のエジプトなど中東動乱にも綱渡りだったと思いますが、結果的にうまくいっています。ただ、これは反発する人も多いでしょう。独裁であってもイスラエルのことを考えると安定した政権がよかつたと考える人も多いでしょう。このあとエジプトが不安定になつてイスラエルが困るだろうと考えると、評価がどうなるかはこれからでしょう。ただ当面マスコミその他でもオバマ外交はうまくやったということになつていようです。

ありません。あえていえば、「日米ロビー」に属している人は自分たちの利益がかかっているからがんばっています。そういう人がいるのはしかたない。そういう人たちの存在を知つて対応をすべきです。もつと多極的にアメリカを見る、もつと多極的にアメリカの人とつきあうという、それにつきまます。

橋川● アメリカにいつて、アメリカ通といわれる人たちがなんで単純な思考に陥つてしまうのか。アメリカの誰々がこういつているから日米関係がおかしいとか、政権がもたないとか。あなたはアメリカの人をどれだけ知っているのかと問いたくなる。

大統領選挙で民主党が勝つて、次の中間選挙で共和党が勝つて、両方の政党が大統領も議会も両方握るということはむしろ例外的なことであつて、アメリカというのはつねに一つが強くなれば、対抗勢力が出てきて常にやり合つていると、見ておかないといけない。人権外交といっているからといって信頼できるとは限らない。人権外交といつても、一国主義の面もあつて、人権のためにといつてソマリアに介入したけれど、だめだといつてさつと引き上げてしまつておしまいにしてしまつた。そのときには人権外交を掲げていてもいざとなれば、撤退してしまふ。

金子● アメリカが掲げる原理、人権もグローバリゼーション

さらに経済では、多少失業率が下がりはじめています。

ひところよりはオバマ再選の可能性が出てきた。それに共和党にこれはという候補が出てこない。今後彗星のごとく誰かが出てくるということもなさそうです。

オバマが再選されると、すこしは正気に戻る可能性もあるのかもしれない。

### アメリカとの新しいつきあい方

橋川● これから日本がそのアメリカとどう向き合うか。少なくともアメリカには何でもついて行くではなくて、いろんな要素で変わる可能性があるアメリカと今の日本の政権がかんたんに日米同盟といつてしまふ。もう少し勉強しろよというしかない。

金子● アメリカといつてもいろいろな面があつて一つだけではありません。一つの面だけを見て良かった悪かつたで一喜一憂しても仕方ありません。アメリカがだめだといつて、では中国とだけ仲良くするのか。どちらかという二者択一の発想はもうやめなさいといけない。中国と仲良くするのに、アメリカとのつきあいの部分を切り取つて中国にもつていくではありません。特別アメリカとの関係を悪くする必要はない。どちらをとるかで振り回される必要は

ン、新自由主義などなど。貿易は自由でなければいけない、そのとおりだという人もいますが、中身をきちんと吟味して対応していかなければなりません。貿易を自由化すれば、どうなるか。強いものが勝つに決まっています。金融のワシントンコンセンサスなどとうまいことばを使います。それは経済は強いものが勝つに決まっていますから、それをどういふふうにそれぞれの国の条件にあわせて対応するかが必要です。

アメリカは競争社会ですから、常に政権は交代する可能性を含みながら動いています。この間、沖縄問題で発言した人たちは、裏を返せば、自分たちは権力の側において利益を得る側の人たちです。それを守ろうとするのは当然です。これはマスコミの問題にもなりますが、そのときに向こう側にもいろいろな人がいる、ちがう考え方の人がいるんだということを見ていく、それを紹介していくことをやらないとなりません。今はアメリカの一面だけを見てしまつていふ。

もう、アメリカがモデルだという考え方を捨てるべきだと思います。もちろん、ほかの国に特別いいモデルがあるわけではありません。戦後の日本はアメリカをあまりにもモデルとして見すぎたと思います。